

指導資料

教育経営 第38号

鹿児島県総合教育センター
令和2年4月発行

対象
校種

中学校 義務教育学校
高等学校 特別支援学校



高大接続改革から考える授業づくり —高等学校はこれからの大学入学者選抜を見通して何をすべきか—

高大接続改革は、学力の三要素を軸として高等学校と大学を接続しようとするものである。これからの高等学校では、育成を目指す資質・能力をより一層明確にした授業づくりが重要となる。改革の趣旨を確認するとともに、授業改善のための基本的な考え方について述べる。

1 高大接続改革とは何か

高大接続改革は、高等学校教育と大学教育、両者をつなぐ大学入学者選抜を連続的に捉え、一体的に改革しようとするものである。

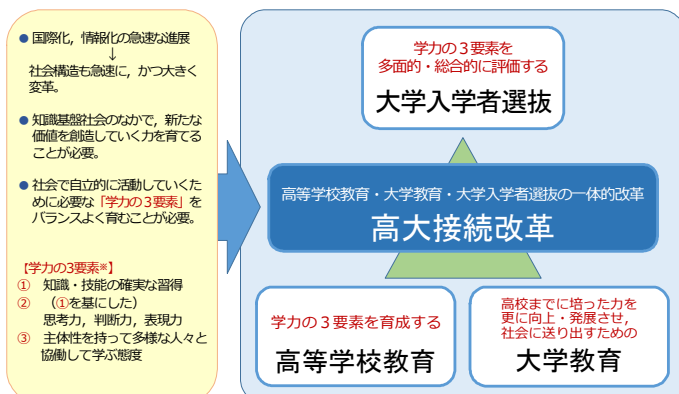
高等学校と大学の接続の改善そのものについては、学校間接続に関する大きな課題として長年にわたって議論が積み重ねられてきた。今般の改革は、こうした議論の上に立ち、教育再生実行会議や中央教育審議会、高大接続システム改革会議の提言等を基に改革の具体化が進められているところである。

改革の必要性について文部科学省は「グローバル化の進展、技術革新などに伴い、社会構造も急速に、かつ大きく変革。知識基盤社会のなかで、新たな価値を創造していく力を育てることが必要。社会で自立的に活動していくために必要な『学力の3要素』をバランスよく育むことが必要。」と説明している。

つまり、大きな変化が予測される新たな時代の創り手として、社会で自立的に行動していくためには、学力の三要素（知識・技能／思考力・判断力・表現力／主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度）をバランスよく育成することが重要であり、義務教育段階から一貫した理念の下、学力の三要素を高等学校教育で確実に育成し、大学教育で更なる伸長を図るため、それをつなぐ大学入

学者選抜においても、多面的・総合的に評価するという一体的な改革を進めていく必要がある——ということである（図1）。

過去の学習指導要領改訂時には「学習指導要領が変わっても、入試が変わらなければ教育現場は変えられない」という議論が幾度となく起こっていた。確かに、知識の再生を問う評価に偏った問題が主流の画一的な選抜試験だけでは、高等学校までの学びの成果が十分に評価されず、教師の指導法や生徒の学習態度に良い影響は与えない。結果として、高等学校の授業は「知識伝達型」とであると指摘されることが多かった。しかし、今次の高等学校以下の新学習指導要領とこれからの大学入学者選抜は、同じ教育の姿を実現しようとするものである。高大接続改革は、そのための三位一体の改革として進められていることを理解する必要がある。



※ 学力の3要素は、中央教育審議会「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～全ての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～（答申）」（平成26年12月22日）で示されたもの

図1 「高大接続改革」の必要性
出所：文部科学省ホームページ

2 大学入学者選抜における改革

大学入学者選抜においては、1989年度から実施されてきた大学入試センター試験を廃止し、2020年度から**大学入学共通テスト**（以下「共通テスト」という。）が実施される（2021年1月実施）。

注目を集めた英語民間試験の活用と共通テストにおける記述式問題の出題は、大学入学者選抜の改革方策として中央教育審議会答申（2014年『新しい時代にふさわしい 高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について』）で提言され準備が進められてきたものであった。しかし、英語民間試験については居住地域や経済状況による受験機会の格差などの課題を、記述式問題については採点の公平性を巡る課題を解消することができず、2019年11月と12月に相次いで見送りが表明された。

ただし、これらの見送りによって、共通テストが実質的に大学入試センター試験に後戻りしたわけではない。先の中央教育審議会答申で示された改革方策のうち、「思考力・判断力・表現力中心の評価」は維持されており、共通テストの問題作成方針には「**知識の理解の質を問う問題や、思考力、判断力、表現力を発揮して解くことが求められる問題を重視する**」と明記されていることに留意が必要である。

高等学校では、新学習指導要領による教育が2022年度から年次進行で実施される。この年に入学した高校1年生が大学入学者選抜に向かう高校3年生となる2024年度に小・中・高等学校全ての校種で新学習指導要領に基づく教育となる。共通テストはこの段階で新学習指導要領の教科・科目に対応したものとなる（図2）。

共通テストは2020年度からの実施となるが、これは現行学習指導要領の教科・科目の枠組においても、知識・技能の評価はもちろん、思考力、判断力、表現力を含めた学力をしっかりと問うという方針の下に実施されるものである。

なお、文部科学省は、英語民間試験の活用について有識者による検討会議を設け、大学入学

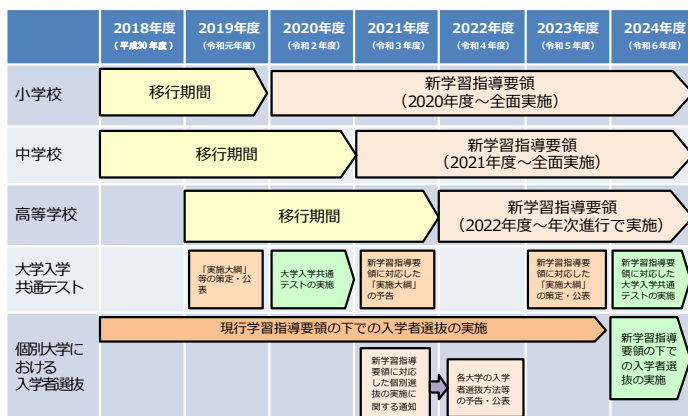


図2 新学習指導要領と大学入学共通テスト等の実施スケジュール（2019年6月時点）
（文部科学省ホームページを基に筆者作成）

者選抜における英語四技能（読む・聞く・話す・書く）の適切な評価の仕組みの在り方について、2020年末をめどに結論を出すことにしている。

個別大学における入学者選抜も学力の三要素を多面的・総合的に評価する選抜に改革することが求められている。入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）の明確化とその公表の義務付けは2017年4月から始まっており、各大学学部が育成を目指す人物像とそれにリンクした入学者選抜方法を定めている。選抜の特性をより明確にする観点から、国立大学では一般入試、AO入試、推薦入試の区分の名称をそれぞれ「一般選抜」、「総合型選抜」、「学校推薦型選抜」に改め、多様な評価方法を活用するなど、改革は漸進的に進んでいる。私立大学でも個別入試における工夫や改革が行われている。

3 共通テストのねらい

大学入学者選抜は、「高等学校教育を通じて育成を目指す資質・能力」と「大学教育の基礎力として求める力」の接点である。共通テストにおいては、その両者を踏まえ、**高等学校教育の成果として身に付けた、大学教育の基礎力となる知識・技能や思考力、判断力、表現力を問う問題**が作成されることになる。

実施に向けた試行調査問題（2017年、2018年）は、大学入試センター試験から傾向を大きく変え、社会生活や日常生活から課題を発見し解決策を構想したり、資料やデータ等を基に考察したりするなど、問題の場面設定が「**どのように学ぶか**」を意識したものとなっている。これは

高等学校の授業における生徒の学びをイメージしており、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善をより活性化してほしいというメッセージと解すべきであろう。各高等学校においては、共通テストのねらいを学校の実態や生徒の特性等を踏まえた授業づくりに生かす取組が有効になる。(共通テストの問題作成方針等は、大学入試センター公表資料を参照【検索ルート】大学入試センターTOP>大学入学共通テスト>大学入学共通テストについて)

4 これからの高等学校の授業づくり

新学習指導要領が掲げる資質・能力の三つの柱は、学校教育法や海外のコンピテンシー(資質・能力)に基づく教育改革の諸潮流を参考としながら、新しい教育課程に共通する重要な枠組として今次の学習指導要領改訂で整理、明確化されたものである。これらは前項までに述べた高大接続改革における学力の三要素と軌を一にするものである。

資質・能力の三つの柱 (新学習指導要領)

①何を理解しているか、何ができるか
⇒生きて働く「知識及び技能」の習得

②理解していること、できることをどう使うか
⇒未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」の育成

③どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか
⇒学びを社会や人生に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養

学力の三要素 (高大接続改革)

①知識・技能の確実な習得

②(①を基にした) 思考力、判断力、表現力

③主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

したがって、新学習指導要領に基づき、学校がどのような資質・能力を育成するのかを明確にし、主体的・対話的で深い学びが実現する授業を実践することが、これからの社会で必要とされる力を育むと同時に、大学教育の基礎力として求められる力の育成にもつながるのである。

(1) 資質・能力を明確にした教育課程

まず取り組むべきことは、抽象的な表現になりがちな学校教育目標を、自校で育てたいと考える資質・能力にまで落とし込んで整理し、そ

の育成を教育課程編成上の方針として位置付けることである。その際、学校教育目標を資質・能力の三つの柱の観点から分析的に捉え直すことが大切である。

次は学校教育目標を実現するための授業の設定である。考えなければならないのは、各教科等の指導の中で結果として資質・能力の育成が図られたのか、それとも資質・能力の育成を明確に意図した授業として構成を考えたのかの違いである。新学習指導要領が求めているのは後者である。

例えば、A高等学校が「伝える力」を教科等で横断的に育成するには、各教科等で独自に伝える力を育成するためのプランをつくるのではなく、伝える力を育成するために各教科等のどのような特質を統合していくのがよいかという設定が必要になるのである(図3)。つまり、図3においては、上側の捉え方から下側の捉え方へ移行することが肝要となる。

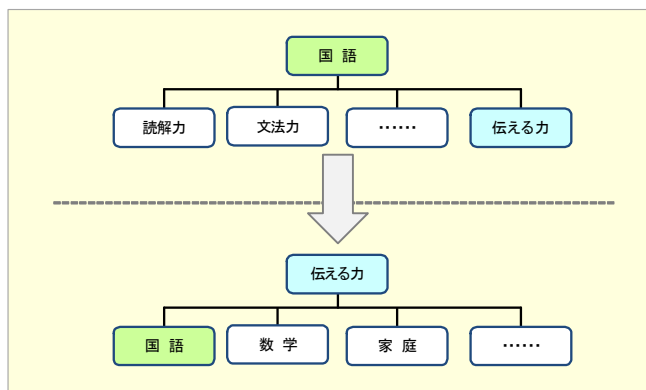


図3 教科等横断的に育成する資質・能力と教科の関係(A高等学校)

ここで言う各教科等の特質の一つに、新学習指導要領で明記された見方・考え方がある。これは教科特有の物事を捉える視点や考え方であり、深い学びにも関わるものである。今後は各教科等の特質を十分に把握した上で、教科を越えた協働によって自校の教育課程を絶えず検証し改善するカリキュラム・マネジメントの実現が重要になる。(資質・能力を明確にした教育課程や授業事例は、教育情報誌でも紹介されている。例えば『VIEW21 高校版』/【検索ルート】ベネッセ教育総合研究所HOME/教育情報/高校向け/バックナンバー) (カリキュラム・マネジメントについては、当センター指導資料『教育経営 第36号』[平成31年4月発行]を参照)

(2) 単元全体で行う授業デザイン

主体的・対話的で深い学びが実現する授業となると、毎時間話し合い活動を入れたり、プレゼンテーションを課したりするなど、“やることありき”の指導計画を立ててしまいがちである。重視すべきなのは、**習得・活用・探究**という学びの過程の中で、生徒が自ら考え、自分の考えを整理し、学習内容の定着を図ることである。

稲井(2019)は、「単元の中で主にどの学習プロセスに重きを置くのかを考え、単元全体で**インプット→インテーク→アウトプット**の大きな流れが生まれるように授業をデザインする」ことが、主体的・対話的で深い学びを実現する効果の高い手段であるとしている。

学習プロセス

《インプット》情報の受容

教師の話の聞いたり、教科書や資料を読んだりすること

《インテーク》思考の深化

問いを考えるため、熟考すること

《アウトプット》思考の外化

発言したり、話し合ったり、ノートにまとめたりすること

出所：稲井達也『高校授業「学び」のつくり方』2019年、東洋館出版社

学習プロセスに基づく、1単位時間の中でインプット、インテーク、アウトプットの全てを盛り込むこともあれば、内容によってはインプットやインテークに多くの時間を割く方が効果的な場合もある。一般に1単位時間の授業は、導入、展開、まとめ(終末)という部分から成り立っているが、毎回無理に授業の終わりにまとめを入れようとするれば、生徒の思考を遮断してしまうことになる。1単位時間ごとに学習を完結させることよりも、単元という発想に立って**学習の連続性・継続性を重視**することが大切であり、その積み重ねが生徒の深い学びと自律的な探究につながるのである。

授業のデザインに当たっては、単元の中でどのようなことに最も時間をかけるのかを事前に明確にしておくことが重要である。そのためには、学習指導要領の指導事項はもちろん、単元で身に付ける基本的な知識・技能や発展的な事項についても十分に確認しておく必要がある。

授業を工夫しても、校内テストが知識再生型の問題のみでは意味がない。テストの一部でも授業内容に関連した思考力、判断力、表現力等をみる問題を取り入れ、新しい学びの姿に相応しいものにすることが大切である。共通テストのねらいや生徒の実態等を踏まえて工夫を重ねるとともに、教科間の共通理解を図り、自校の**成績評価の在り方**を検討することが重要である。

(3) 学校全体で推進するために

学校として育てたい資質・能力の育成は、特定の教科の取組だけで実現できるものではない。2019年度から先行実施となった**総合的な探究の時間を中核に、各教科等の学びを往還**させながら教育課程全体の中で育成を図っていく取組が必要である。こうした取組を学校全体で推進するためには、校長の方針の下、ミドルリーダーを中心とするチームを作るなど組織的に進める体制にすることが重要である。**学校が育成をめざす資質・能力とそのための授業デザインをシラバスなどで可視化し、学校内外で共有**していく。その取組が自校の特徴をより鮮明にし、**地域に信頼される学校づくり**につながるのである。

高大接続改革を起点に各高等学校が新学習指導要領に基づく授業改善を推進できるか否かが、今後の学校への評価の分かれ目となるだろう。

—引用・参考文献—

- 教育再生実行会議『高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について(第四次提言)』平成25年
 - 中央教育審議会『新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について(答申)』平成26年
 - 高大接続システム改革会議『最終報告』平成28年
 - 文部科学省『高等学校学習指導要領 総則編』平成30年
 - 山内太地、本間正人『高大接続改革——変わる入試と教育システム』2016年、ちくま新書
 - C・ファデル、M・ピアリック、B・トリリング/岸学(監訳)『21世紀の学習者と教育の4つの次元』2016年、北大路書房
 - 伯井美徳、大杉住子『2020年度大学入試改革! 共通テストのすべてがわかる本』2017年、教育開発研究所
 - 稲井達也『高校授業「学び」のつくり方 大学入学共通テストが求める「探究学力」の育成』2019年、東洋館出版社
- (教科教育研修課 甲斐 修)